

ホモ・サピエンスにおける「認知革命」に関する 心理学的考察

○清重友輝・中塚善次郎
(ひびきのさと人間精神学研究所)

問題と目的

多数の人類種の中で、なぜホモ・サピエンスだけが生き残り、飛躍的な発展を遂げることができたのか。これは、人間という存在への理解を深める上で興味深い研究テーマと言えるが、近年、このテーマにおける重要なキーワードとして「認知革命」という言葉が注目を集めている。本稿では、「認知革命」という現象が、ホモ・サピエンスに何がもたらしたのかを、独自の心理学モデルに基づき考察する。

人間精神の心理学モデル

中塚(1994)は、人間の精神機能の構造的かつ包括的な理解を意図し、「人間精神の心理学モデル」を構築した。これは、「自己」(自分に閉じた心)と「他己」(他者に開かれた心)という二つのモーメントに、個人的-集合的無意識(むいしき)、情動-感情(こころ)、感覚-運動(からだ)、認知-言語(あたま)、自我-人格(たましい)の、五つの精神機能領域を想定したものである。そして、このモデルを支える哲学的心理学理論を「自己・他己双対理論」と名付け、様々な研究に応用してきている。

考察

ハラリ(柴田訳, 2016)によれば、「認知革命」とは、約7万年前から3万年前にかけてホモ・サピエンスに見られた、認知的能力における革命的な変化のことであり、より具体的には、新しい言語技能の獲得による意思伝達能力の向上(以前よりも大量の情報伝達が可能になった)を指している。この結果、集団の団結力が強化されたことで大集団による協力体制が構築され、それがホモ・サピエンスの飛躍的な発展の原動力になったと、ハラリは述べている。これを簡潔にまとめれば、認知能力(知的能力)の変革→新たな言語技能の獲得→コミュニケーション能力の進歩→団結力の強化→飛躍的な発展、という構図になる。

「認知革命」以後のホモ・サピエンスの活動を見る限り、コミュニケーションの質が向上したこ

とで団結力が高まり、それが文明発展の基礎になったとする見方は正しい。だが、それが認知能力の変革によってもたらされたとする考え方には賛同できない。人間同士のコミュニケーションにおいて重要なのは、認知能力の高低ではなく、心と心の通じ合いである。機械的な情報伝達を繰り返しても、それで結びつきが強まるわけではない。互いの心が通じ合い、同情や共感が生まれることで、心理的距離は縮まる。人間関係の強化においては、知的領域ではなく情的領域の作用が重要なのであり、この点を考慮していない(あるいは意図的に無視している)ことが、従来の考え方の最大の問題点といえる。

これを踏まえ、中塚の自己・他己双対理論とそれに基づいて構築された「人間精神の心理学モデル」を用いて「認知革命」を考察した結果、以下のような見解を得た。

まず、①「認知革命」という現象は、その名に反して認知-言語機能(あたま)ではなく、情動-感情機能(こころ)における変化を中核としている。次に、②この変化とは、それまで情動機能の作用(欲求や情緒、気分など)しかなかった「こころ」の領域に、新たに感情機能の作用(人の心を感じるこころ)が生まれたことを指す。そして、③この変化は、「こころ」の領域だけに生じたものではなく、精神全体に及ぶものであり、それは「他己」(他者に開かれた心)という新しいモーメントが発生したことを意味している。

約7万年前より以前のホモ・サピエンスには、他の動物と同じく「自己」(自分に閉じた心)しかなく、他者との結びつきも自利に基づくものでしかなかった。だが、新しく「他己」を得たことで、「人の心を感じるこころ」が生まれ、それが他者との関係性を非常に強固なものとした。それが、「認知革命」と呼ばれる現象の実態であると考えられる。

ハラリ, Y. N. 柴田裕之訳(2016) サピエンス全史(上) - 文明の構造と人類の幸福, 河出書房新社.
中塚善次郎(1994) 人間精神学序説, 風間書房.